

◇拠点形成概要

機 関 名	東京大学
拠点のプログラム名称	共生のための国際哲学教育研究センター
中核となる専攻等名	総合文化研究科超域文化科学専攻
事業推進担当者	(拠点リーダー) 小林 康夫 教授 外 22 名
<p>[拠点形成の目的]</p> <p>21世紀COEプログラム『共生のための国際哲学交流センター』は、「共生」という根本理念のもとに人類の未来を切り開く哲学的な思考を探求し、アジア・北米・西欧の三極の交流を通じて、実りある学術成果をあげた。グローバルCOE『共生のための国際哲学教育研究センター』では、この成果を発展的に受け継ぎ、さらに国際的な学術交流を通して、グローバリゼーションという前代未聞の時代における「人間存在の再定義」のための<b>哲学的な共同研究ネットワークの拠点形成</b>を目指す。</p> <p>また、本拠点は、総合的な思考能力を有する若手研究者を、あくまでも実践の場において養成する高度な教育的機能も果たす。自然科学や最新テクノロジーから表象文化、宗教文化までを問題化しうる幅広い<b>知的受容能力</b>、創造的な知の対話に開かれた<b>国際的な言語実践能力</b>、そして、諸文化の歴史的基層に通じた<b>総合的理解力</b>を若手研究者が習得するために、本拠点は海外の研究機関や研究者との連携において、「<b>中期教育プログラム</b>」を年間4-5本運営する。また、若手研究員が共同で自主的に運営する「<b>短期教育プログラム</b>」を積極的に支援する。</p> <p>21世紀COEプログラムが掲げた三極構造はさらに拡充され、「共生」の世界観を探求するために「<b>イスラーム理解講座</b>」を継続的に実施する。また、おもに海外の研究者とともに日本思想を今日的な視点から読み直し、その成果を国外に発信するために「<b>日本思想セミナー</b>」を開催する。</p> <p>本センターの最終目標は、多様な視点から「<b>人間存在の再定義</b>」を試みることで、人類が直面する根本問題に対して、「<b>共生的世界観</b>」を打ち立てるための国際的な哲学教育研究ネットワークを形成することである。</p> <p>[拠点形成計画及び進捗状況の概要]</p> <p>アジア・北米・西欧の三極の思想的交流のみならず、イスラーム思想・文化の理解をも踏まえた国際的な哲学教育研究ネットワークを形成するために、ニューヨーク、パリ、台湾、ソウル、アルゼンチンなどで、<b>本拠点主催・共催の国際会議をのべ18回、国内では7回の国際会議を主催し、のべ33名の海外の研究者を招聘した</b>。イスラーム思想・文化の理解を深め、異なる文明の「共生」の世界史を探るために、<b>イスラーム理解講座を計8回開催</b>し、政治、宗教、歴史、文化といったさまざまな観点からイスラームの諸相を分析した。おもに海外研究者が実施する「<b>日本思想セミナー</b>」は継続され、今度は、日本思想の批判的再検討の成果を本拠点が国外に発信することも重要となる。現在の科学技術を哲学的に考察する「<b>技術哲学セミナー</b>」も開催される。本拠点との連携を求める要請は日々、数多く寄せられており、今後も多様な学術ネットワークを双方向的な形でさらに深化させていく。</p> <p>本拠点では若手の人材育成として、総合的な思考能力を有する若手研究者を国内外の実践の場において養成する高度な「<b>中期教育プログラム</b>」を実施してきた。現在までに「脳科学と倫理」「時代と無意識」「哲学としての現代中国」「世俗化・国家・宗教」が実施されて優れた成果をあげており、今後は「イメージ研究の再構築」「精神分析と欲望のエステティクス」「近代東アジアのエクリチュールと思考」が開設される。若手研究者が英語の実践的能力を向上させるために「<b>アカデミック・イングリッシュ</b>」セミナーが開設され、海外での発表は支援されているため、これまで<b>若手による国際会議での発表回数</b>はのべ<b>83回</b>にのぼる。また、若手研究者の発意と責任によって企画・運営される「<b>短期教育プログラム</b>」は脳科学から芸術まですでに6本を数えており、今後もこうした若手主導の研究教育活動は支援される。本拠点は2008年度から<b>東京大学の大学院の制度内に独自のカリキュラム</b>を設け、博士課程の学生を受け入れており、その教育活動を大学制度として定着させている。</p> <p>成果の公表のために、事業推進担当者の外国語著作<b>Collection UTCP</b>を計<b>3冊</b>、本COEの研究結果の記録である<b>UTCP Booklet</b>を計<b>12冊</b>刊行した。事業推進担当者や研究員の出版物も好調で、<b>単著刊行は計14冊に上り、編著は計3本、共著は12本、論文は計51本刊行された</b>。今後も英語だけでなく複数の言語で活動の成果を公刊していく。インターネットによる情報発信も活発で、ウェブサイト上でイベントを随時告知することで、当該の催事に関心のある一般の方に広く情報が行き渡るように配慮している。また、研究教育活動の成果は随時<b>ブログ報告</b>として、英語および中国語をも併用しつつ、ウェブサイト上に公開し、獲得された新たな人文学の知見を積極的に社会に還元していく。最終年度はこれまで連携してきた海外の研究者とともに<b>総括シンポジウム</b>を開催し、人文知の多角的な交錯を通じて「<b>共生的世界観</b>」を描き出す。</p>	

#### ◇グローバルCOEプログラム委員会における評価

##### (総括評価)

現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される。

##### (コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、本グローバルCOEプログラムを大学の将来構想の実現を目指す東京大学アクションプラン推進の中核と位置付け、事業の推進と活性化のために、総長のリーダーシップの下で組織的なバックアップ体制を整え、研究の推進、若手研究者の育成、国際的交流を支援する取組みがなされており、評価できる。しかしながら、人文科学分野にグローバルCOEプログラムの採択が2拠点あることなどを考慮し、全体のバランス、また、今後の拠点形成への大学としての積極的な関与を明確にする必要がある。

拠点形成全体については、多様な文化への配慮は評価できる。

人材育成面については、具体的に教育プログラムを構築、実現し、更に若手教員、大学院学生に海外での発信を推進し、成果をあげており、評価できる。

研究活動面については、積極的な国際的展開は評価できるが、「共生」を拠点の基本的概念とすることについて、更に明確な軸を構築することが必要である。

補助金の適切かつ効果的使用については、適切であり、交付額が申請額を大幅に下回ったにもかかわらず、工夫して多大な成果をあげており、評価できる。

留意事項への対応については、特に「共生」の概念について、明確化の努力が行われたことは評価できるが、まだ、その成果に基づき、学問分野相互の連関を明確にできているとは言い難く、今後、一層の努力が必要である。

今後の展望については、これまでの努力を継続することによって、当初の目的は達成されると考えられるが、更に継続的に国際拠点として展開するためには、大学としての関与が一層必要である。